

屋外飼養による肥育技術に関する試験

とくに仕上期における管理方式の検討

井好利郎・横山文泰・長友邦男

(宮崎県総合農業試験場)

肥育牛の管理方式については、種々の方法が生み出され、普及されてきた。当場でも、周年屋外群飼による肥育試験を昭和45年来、行なってきたり、若令肥育では肉牛の生産能力にはほとんど問題がないことを確かめてきたが、農家側では仕上期には肉質を向上させるべきだという考えで、単房、つなぎ牛舎等による仕上げがなされているので、これらを比較検討するため本試験を実施した。

1. 試験方法

試験区分は群飼区、単房区、つなぎ区の3区であり、前、中期8ヵ月間、屋外群飼したものを後期の4ヵ月間3区にふり分けて試験を行なった。試験期間は昭和50年12月19日～昭和51年12月31日までの360日間である。供試中は黒毛和種去勢牛17頭を用い群飼区、つなぎ区に6頭、単房区に5頭供試した。飼料給与は昭和48年制定の県給与基準に準じて行なった。管理施設は1頭当り10㎡の屋外飼育場と4.34㎡の単房牛舎と2.75㎡のつなぎ牛舎を用いた。

2. 試験結果

(1) 増体成績

開始時体重は268.7kgであり、中期終了時には484.8kgとなり、その間の1日当り増体は0.90であった。後期開始時にこれらを3区にふり分けて、群飼区486.0kg、単房区483.0kg、つなぎ区485.2kgとしたが、終了時にはそれぞれ、581.5kg、600.5kg、583.2kgとなった。その間の1日当り増体量はそれぞれ、0.80kg、0.98kg、0.82kgであり、また、全期間の1日当り増体量はそれぞれ、0.87kg、0.92kg、0.87kgであった。以上のことから、管理方式を変えた仕上期の増体は単房区が最もすぐれていたが、本試験は肥育期間が12ヵ月の若令肥育であったため、全期間の増体成績には大きな影響はおよぼさなかった。

(2) 飼料摂取量

全期間の飼料摂取量は群飼区において、濃厚飼料2239.5kg、乾草573.3kg、生草1881.1kg、単房区におい

てはそれぞれ、2241.1kg、572.7kg、1881.1kg、つなぎ区においては2232.3kg、572.1kg、1881.1kgであり、区間に差は認められなかった。また、仕上期についても差は認められなかった。このことは本試験が濃厚飼料、粗飼料ともに定量給与で行なったためである。

(3) 管理労働時間

1日1頭当りの管理労働時間は群飼区7.0分、単房区10.6分、つなぎ区9.8分であり、群飼区は他の2区に比較して約3分少なくなっている。その原因をみると、単房区が他の区に比較してボロ出しに多く時間を要していること、飼料給与について群飼区は他の2区の約半分であること、単房区、つなぎ区は糞尿による牛体の汚染がひどかったため、単房区が週1回、つなぎ区が2日に1回、汚染部の水洗いを行なったことによるものである。

(4) と体成績

と体成績は表1に示すとおりである。枝肉重量等、いずれの形質においても区間に差は認められなかった。また、脂肪交雑についても、単房区が1.8、他の2区が1.3であったが、両者に有意差は認められなかった。

第1表と体成績

区分	項目						
	枝肉重量(kg)	枝肉歩留(%)	皮下脂肪厚(キ甲)(cm)	脂肪交雑	ロース芯面積(cm ²)	枝肉規格	
群飼区	356.6	65.0	19.5	1.3	40.1	上3 中3	
単房区	363.5	64.8	17.0	1.8	41.5	上3 中2	
つなぎ区	360.1	65.2	18.0	1.3	43.7	上2 中4	

3. まとめ

以上のことから、肉質への影響は認められなかったがそれぞれの管理方式に有利性が認められたので個々の農家の経営規模に応じた方式をとり入れるのが妥当であるが、経営的な観点から考えると若令肥育の場合は仕上期まで群として飼養することが有利であると考えられる。